

目次

1. 旧事務局より
2. 新事務局より
3. 前年度編集責任者より
4. 新編集委員より
5. 本年度編集責任者より
6. 追悼：木下光一先生
7. 運営・企画担当より
8. 2011年度例会予定
9. フランス語談話会について
10. 研究会だより
11. 収支決算報告
12. メーリングリスト frenchling からのお知らせ
13. 編集後記

1. 新事務局より

2012年度から今後3年間、事務局は青山学院大学フランス語学研究所に置かれます。業務は、France DHORNEと旧編集委員の鳥居正文の二人で行っていくこととなります。どうぞよろしくお願いいたします。

連絡先は、以下の通りです。

〒150 - 8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25
 青山学院大学フランス文学科合同研究室内
 日本フランス語学会事務局
 e-mail : belf-bureau@cl.aoyama.ac.jp

事務局は6年ぶりに東京に戻りましたが、事務の運営に関しては、原則的に、これまでの3年間と同じ仕方で行いたいと思います。

念のために要点を述べますと、以下の通りです。

1) 以前に春の仏文学会開催時に行っていたシンポジウム会場での会費の直接徴収と当該年度の『フランス語学研究』の配布は行いません。

2) 会費の徴収は基本的に郵便振替で行います。『フランス語学研究』に同封します振り込み用紙で会費を速やかにお払いくださるようお願いいたします。3年以上にわたって会費納入が滞っている場合は会員資格が停止され、『フランス語学研究』は送付されなくなりますのでご注意ください。

3) 入会の申し込みまたは事務局への問い合わせは、上記のメールアドレスをお願いします。

旧事務局の大阪大学の井元さん、春木さん、三藤さんそして木内さん (Les 3 Mousquetaires!) は、事務局業務の新しいやり方を導入してくれました。おかげで仕事を楽に引き継ぐことができます。感謝いたします。ご苦労さまでした。

青山学院大学では、これまで一度もBELFの事務局の経験はありませんが、旧事務局メンバーの方々にも適宜、相談申し上げながら、なんとかこなしていきたいと思っておりますので、みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

(France Dhorne)

2. 旧事務局より

大阪大学言語文化研究科では 2000-2002 年に引き続いて、2009 年から再び 3 年間、事務局の仕事を担当しました。複数の学会員、編集委員がいる大学が少ないためですが、幸い大阪大学の当部局には編集委員やその経験者が 4 人所属していますので、10 年ほどの間に 2 回事務局を引き受けるという結果になりました。しかし、2 回目に引き受けることになったときにもニュースレターで説明しましたが、近年、事務局の業務を大幅に効率化したことで事務局の仕事も以前に比べれば大幅にやりやすくなったと思います。もちろん、会計業務など気を遣うことも多い仕事ですが、学会の活動のためにはなくてはならない業務ですから、これからも学会員全員で協力し合ってこなしていく必要があります。幸い、今年度から 3 年間の事務局業務は青山学院大学で引き受けてもらうことになりました。しかし、常に次の事務局はどこに引き受けてもらえるか不安な状況では学会の活動にも影響が出かねません。

現在、学会の仕事は事務局だけではなく、編集委員の間で出来るだけ分担して行っています。その中で事務局の主な仕事は、入会、脱会、住所変更等会員名簿の管理、郵便振替による会費の管理や経費の支払い等の会計業務、フランス図書に委託している学会誌の販売関係の業務、メールでの問い合わせなどに対する対外的な対応、学会誌バックナンバーや過去の資料の保管といったところです。別項でご報告しますが、過去 3 年以前の学会誌の電子アーカイブ化による公開によって、学会誌販売やバックナンバーの保管など一部業務がさらに軽減されると予想されます。会員名簿の管理や会計業務も、コンピュータのおかげで昔に比べれば格段に効率化されています。ですから、編集委員が一人しかいない大学でも事務局を引き受けることはできます。どうしても必要な場合は一部業務に学生アルバイトを雇うことも可能です。

言うまでもなくフランス語学会はフランス語を研究している我々にとって無くてはならない存在です。将来にわたって学会が健全な形でその活動を継続していけるように、今後とも特に若手のメンバーを中心にローテーション的に積極的に事務局を引き受けていくような体制作りをしていく必要があります。自分たちの学会なので、自分たちがその仕事をしなければ成り立ちません。一部の学会員が手弁当で献身的に仕事をして学会を支えてきた時代はと

づくに終わったはずではなかったでしょうか。(文責:春木仁孝)

◆ 学会誌のアーカイブ化について

『フランス語学研究』44号や昨年のニューズレターでご説明しましたが、日本フランス語学会でも『フランス語学研究』のバックナンバーを電子アーカイブ化することになり、2010年3月に「日本フランス語学会著作物取り扱い規程」(44号参照)を定めるなど、そのための手続きを進めてきました。今年の3月に総ての手続きを終え、国立情報学研究所電子図書館事業によって、『フランス語学研究』のバックナンバーが電子アーカイブ化され、一般公開される運びになりました。国立情報学研究所電子図書館による、『フランス語学研究』のバックナンバーのPDF化が終わり次第、今年度中に一般公開が実現する見通しです。これにより、直近の3年間分をのぞき、過去の『フランス語学研究』は無料で閲覧およびダウンロードできるようになります。バックナンバーはこれまでもある程度の整理はしてきましたが、今後は図書館などから多少の注文がある場合に備えて各号若干部数は保存しますが、それ以外は廃棄することになります。

3. 前年度編集責任者より

私たちの学会では、運営の全般を編集委員会が担います。さまざまな業務を編集委員が分担するわけです。「編集責任者」は編集委員の互選によって選ばれることになっていて、2011年度はあきらかに適齢期(?)を過ぎた私に白羽の矢が当たってしまいました。ときに大学の業務と重なって忙しい思いをすることもありましたが、編集委員会が蓄積してきたノウハウと前任の小熊さんを頼りに、なんとか務めてきました。『フランス語学研究』46号の編集も、これを書いている4月20日現在、二校の段階を迎えています。あらためて、編集委員をはじめ会員の皆様の熱意と能力に敬意を表し、快く協力して下さった方々にお礼を申し上げます。

『フランス語学研究』の編集後記にも書きましたが、東日本大震災・原発事故の傷は計り知れない深さで、いまなお光明を見出すにいたっていません。会員の中にも厳しい生活を強いられている方がおられることでしょうか。今年2月には長年にわたって学会を支えて下さった木下光一先生が逝かれ、あの颯爽とした姿と温かい声に接することができなくなってしまいました。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

学会の大事な行事の一つに秋のフランス語談話会がありました。東郷さん、春木さんを中心とする関西の委員にお世話いただいていたのですが、東西の交流促進という所期の目的を果たしたことで、11月がさまざまな学会・研究会や入試などで忙しい時季になったことなどから、紅葉の京都での集まりは2011年度をもって終わることになりました。同時に開かれていた例会は、場所を東京に移すことになっ

ています。

学会の活動ではありませんが、関西フランス語研究会が定期的に開かれていることはご存知の方も多いことでしょう。この4月からは、渡邊さん、塩田さんの骨折りによって、大学院生や若手のための研究会が東京で開催されるようになっていました。これは本当に嬉しいことです。学会としても、多くの会員が世代を超えて親しく交流できる例会その他の集まりをさらに活気あるものにし、学会誌をいっそう充実させていくように努めなければなりません(石野さん、どうぞよろしく)。皆様にはとくに集まりへの参加と投稿をお願いいたします。

(曾我祐典)

4. 新編集委員より

◆ 藤村逸子(名古屋大学)

今年度より編集委員をさせていただくことになりました。どうぞよろしくをお願いいたします。2004年秋より1年間リヨンにおいて研究休暇を過ごすとともに編集委員を辞し、今、指折り数えてみるとあれから8年もたっていることに驚かされます。私は長年大阪の自宅から名古屋に通うという勤務形態をとっており、そのために東京の例会にはなかなか出席しにくい状況でしたが、今後は是非とも参加して勉強させていただきたいと思っています。

2000年ごろから電子化された大規模コーパスを使った言語研究にのめりこんでいます。今はフランス語と日本語の形容詞に関連した研究を行っています。私の勤務先では、コーパス研究のチームがよく機能しています。最初は他の先生の開講するプログラミングの授業で学生と一緒に頑張って勉強しました。研究チームは共用サーバーを持っていて、そこにはフランス語、英語、日本語など各種言語のコーパスを蓄積し、共有し、情報交換を行いながら利用しています。フランスでも言語学の研究チームには情報科学の専門家が配置され、コーパスを利用した研究がごく普通になってきています。ただ見る限り、フランスや他のヨーロッパでは分業がはっきりして(これはおそらく研究だけではなく職業に関する一般的なヨーロッパの伝統なのでしょう)、言語学者自らが情報科学の分野に精通しているということはないように思います。ご存知のように電子データは無限にあります。これをうまく利用することによって、言語研究を大きく進展させることは十分に可能です。

昨年は初めて「アイトラッキング(視線測定装置)」を使った研究をしました。フランス語のミニマルペアの2文を読む視線の動きを測定し面白い結果を得ました。言語使用者に対する調査として、「内省法」を補完する有効な方法かもしれないという気がしました。

というわけで、私の関心は、言語使用がいかんにして言語構造を作っていくかという、共時的変異や通時的変化を含んだ問題です。この問題はすでに私の卒論、修論のテーマでした。卒論や修論のときには願うべくもなかった大規模なデータを扱うことが可能になって、「三つ子の魂100ま

でも」の言のとおり、これからもこのテーマでやっていきたいと思っています。なにとぞご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

◆ 小田 涼（京都大学非常勤講師）

2012年度より編集委員を務めることになりました。体力的な理由から、東京で開催される例会に足を運ぶことはあまりなかったのですが、編集委員に加えていただいたのですから、これからはもう少し積極的に例会に参加しようと思っています。

もともとは国文学を勉強するつもりで大学の文学部に入学しましたが、一般教養課程でいろいろな授業を受けているうちにフランス語学に興味を持つようになり、一大決心をして3回生から総合人間学部へ転学部しました。学部生のころからずっと名詞句の指示の問題に関心を持っており、2000年秋からストラスブール第二大学の Georges Kleiber 先生のもとで2年学んで周知の指示形容詞についての DEA 論文を書き、ついでパリ第四大学の Francis Corblin 先生のもとで2年学びました。結局フランスでは博士論文を提出することはない、それが少し心残りではあるのですが、2009年によくフランス語の定冠詞についての博士論文を京都大学に提出し、さきごろその出版を果たしたことで自分の気持ちにひとつの区切りをつけました。しかし決して慢心することなく、これからも根気よく（マイペースで）限定詞の研究を続けるつもりです。

数年前から関西の三つの大学で非常勤講師としてフランス語およびフランス語学の授業を担当しています。また、フランスの言語文化についての授業をする機会にめぐまれた縁で、フランスおよびキリスト教文化圏における名前についても勉強を始め、少しずつ情報を集めているところです。

最近、自分によく言い聞かせている言葉がふたつあります。ひとつは Oscar Wilde の « Shoot for the moon. Even if you miss, you will land among the stars. » という言葉です。つねに志は高く、しかし謙虚な姿勢で学ぶことを忘れずにいたいと思っています。もうひとつは François Rabelais の « Science sans conscience n'est que ruine de l'âme. » という言葉です。学問や知識は決して利己的な目的や保身のためにあるのではなく、社会全体の利益・幸福に資するものでなくてはならないことをつねに肝に銘じておくつもりです。

一人前の研究者となるにはまだまだ時間がかかりそうな未熟者の私ですが、(将来的に)少しでもフランス語学会に貢献できればと思い、編集委員の任務を引き受けました。みなさま、どうぞよろしくお願いいたします。

5. 本年度編集責任者より

この度、編集責任者をする事になりました。よろしく申し上げます。

この機会に数えてみました。初めてフランス語学会の前

身フランス語学研究会の会誌『フランス語学研究』に自分の論文が載ったのは32年前でした。もちろん大学院生のその時にはまさか自分がその編集責任者になるとは思っていませんでした。今回お引き受けすることで、その後の30数年間お世話になったフランス語学会にいくらかでも恩返しができればと思います。

今回の私の就任を聞いて、一番不安に思っていたらっしゃるのは木下光一先生かもしれません。木下先生には、30数年前のその頃、事務局の仕事のお手伝いをしていた頃から今日まで、いろいろとご指導いただきました。この場をお借りして、ご冥福をお祈りします。

なかなか例会に出席できないことも多く、いろいろとご迷惑をおかけすることになると思いますが、皆様のご協力を仰ぎながら、できる限り内容の充実した学会誌を作りたいと思います。

(石野好一)

6. 追悼：木下光一先生

日本フランス語学会の創立当初から、学会の存立そのものになってくださったといえるほどの、きわめて多大のご尽力をたまわった木下光一先生が、2012年2月8日、逝去なさいました。この欄では、編集委員のなかで、木下先生と親交のあったお二方に筆をとっていただきました。

木下光一先生を偲ぶ

木下先生にはじめてお目にかかったのは、おそらく1971年ころ、大学院の修士課程の学生だったころだ。当時、東大駒場で開かれていたフランス語学研究会の例会に出席するうち、自己紹介のとき、形態論に興味がありますと言ったら、先生も「ぼくもそうなんだ」とおっしゃり、いろいろと文献をご教示くださった。

それがきっかけで、修論で書いていた、フランス語動詞の形態音韻論的分析にも関心をもってくださり、懇切なアドヴァイスをいただいた。当時、先生はアテネ・フランセで教えていらして、夜の授業の後、私の論文に眼を通してくださった。今でもありありと覚えているが、御茶ノ水駅近くのレストランで、遅い食事を取りながら、修論の草稿をじっくり読んで、的確な指摘をされた。その様子はあたかも老練なコーチがルーキーを指導するがごときだった。

獨協大学の学長になられてからお会いしたとき、「お忙しいでしょう」と申し上げたら、「それでも1科目だけ授業をもっているんだよ」と言われ、「行政職だけじゃつまらないからね」と笑っていた。こんなところにも、多忙さにかまけて研究者魂を忘れぬ先生の姿をうかがうことができるだろう。

先生の研究業績は多々あるが、ここではもっとも重要な2点について触れる。まず、一番にあげたいのは、『フランス語学研究』第12号、pp.1-16に掲載された、「フランス語の非人称ヴァリアントと発話の意味構造」である。先行研究の押さえかた、論文の展開の緻密さ、周到な結論。こ

の小文を書くに際して、改めて読み返してみたが、この分野での輝かしい里程標と言って過言ではなからう。

それから、朝倉季雄先生の『新フランス文法事典』の校閲のお仕事。朝倉先生が『フランス文法事典』を根本的に改訂されるために書かれた原稿を、木下先生が綿密に校閲されなければ、この決定的な書物は世に出ることはなかったに違いない。

論文などを読む折に、先生ならこういう難問をどう解決されるだろうか、いや、それだけでなく、人生の生き方においても、このような場合どう対処されるだろうかとつい考えてしまう。もうそのお声を直接耳にすることはできないが、先生が厳しいが、温かい視線で見えてくださるような気がする。

先生が亡くなったことを新聞で知り、長女の玲子さんにお悔やみの手紙を差し上げたところ、返事があり、それには、午後10時には元気に話したり笑ったりしていたのに、翌日午前12時過ぎには死亡確認されたことあり、文字通り急逝であったことがうかがわれる。

先生のご冥福を衷心よりお祈りする。

(青井 明)

木下先生を悼む

木下先生が亡くなったことを同僚の電話で知ったときは、まさに晴天の霹靂という感じでした。ひと月ちょっと前に戴いた年賀状には、いつもと変わりのない几帳面な文字で、今年は語学会の例会にももっと頻繁に顔を出すつもりだ、と書かれており、去年はほとんどいらっしやらなかったけれど今年はお会いできるもの、と楽しみにしていたからです。

しかし、驚きと悲しみの感情とほぼ同時に頭をよぎったのは、失礼な言い方になるのを省みずに告白すれば、ああ、木下先生らしい退場のされ方かもしれないなあ、ということでした。別れのセンチメンタリズムに墮する前に、大またで颯爽と去って行かれる、昔、白百合の学生が、木下先生といっしょに歩くと速くてついていくのが大変だ、と言っていた、あの風を切るように進む大またで。

私も、何度も木下先生といっしょに歩きました。若いのに負けてはならじと、できるだけ大またで。白百合女子大に非常勤講師としてお誘いいただいたおり、初めての出講日に仙川駅で待ち合わせをし、大学まで連れて行ってくださいましたが、大またの早歩きのみならず、甲州街道を横切るのに信号待ちをせず、当然のように歩道橋を上って行かれるのには感心しました。山が好きで、よく登っておられた先生は、特別に練習のようなものはせず、とにかく普段からしっかり歩くことを心がけておられたようです。

ところで、件の歩道橋ですが、木下先生は渡っている最中に立ち止まり、西の方を向いて、「ここから富士山が見えるんだ」と教えてくださいました。なるほど、歩道橋の上からは、甲州街道の向こう、西の彼方にきれいに富士山が見えました。最近の私は別のルートで大学へ行くことが多

いのですが、たまに晴れた日に仙川の歩道橋を渡るときは、かならず西を向いて富士山の姿を探します。

大学に勤め始めたころ、私が印象深く感じたのは、木下先生がいつも時間通りに授業に行かれていたことです。これは時間通り始まるフランスの大学の授業に慣れていて私にとっては当然のことであったとも言えるのですが、ただ、当時の日本の大学（文学系のみ？仏文系のみ？）には、時間通りに授業に行くなんて偽善的あるいは奴隸的な行為で、10分や15分は遅れて行くのが自由人の証であるかのような風潮があったのです。情けなくも私は、その風潮に長く染まることになったのですが、そういう雰囲気など歯牙にもかけず、木下先生は授業をなさっていました。近年、外からのある種の圧力によって、教員たちがきちんと授業に行くようになってきているのは、みなさんもご存知のとおりです。

定時開始にもかかわらず(?)、木下先生の授業は人気授業でした。レベルが高いので、それなりの学生しか受講していなかったのですが、先生は甘やかしたりせず、クリスチャン・ディオール(CD、成績がC[可]とD[不可]ばかりという意味)などと呼ばれている、という話を聞きました。それでも、先生が獨協大学に移られたあと、その授業を懐かしんで、獨協まで出向いていた白百合の学生が何人かいました。授業の質のみならず、やる気のある若い人を盛り立てて可愛がる木下先生との心理的な交流をうかがわせる出来事だと思います。

語学会でも、同年代の先生方がほとんどまったくいらっしやらない中、はるかに若い私たちを盛り立て、励まし、導いてくださったのが木下先生です。特に上智大学で毎月の例会が開かれていたころは、発表者を囲んでの呑み会のあと、締めとして、木下先生の先導でいつも近くのうなぎ屋にうなぎを食べに行っているような議論をしたことを思い出します。

もはや先生にお会いすることは叶いませんが、先生の恬淡とした佇まいをしっかりと心にとどめ、ご冥福をお祈り申し上げます。

(六鹿 豊)

7. 運営・企画担当より

母校か、それとも本務校か。昨年5月にこの選択肢がふと頭に浮かび、迷わず本務校を選びました。そうして、本年度より、例会会場を慶應義塾大学三田キャンパスから跡見学園女子大学文京キャンパスに移すことにしました。

午後か、それとも鶏口か。同じ選択肢をこのように言い換えてもよいでしょう。慶応にはたくさんのフランス語教員がいますが、逆に、跡見ではフランス語の専任教員は私一人で、おまけに着任前に知り合いだった人が文字どおり一人もいなかったおかげで、誰の顔色も気にせずのびのびと仕事をしています。「修行中は午後、修行を終えたら鶏口(あるいは、鶏口になったことをもってのはじめて修行が終わる)」という信条をもつ私にとって、フランス語学会運

営主担当3年目となる今年、鶏口を目指すべきであることは明らかでした。そして、本年度より、例会会場を慶應義塾大学三田キャンパスから跡見学園女子大学文京キャンパスに移すことにしました。

牛後か、それとも鶏口か。実のところ、この問いは、私の個人的信条を超え、例会発表者や参加者にもかかわる問いのように思われました。というのは、牛後ゆえの行き違いにより、例会当日に大学の門が閉まっていたり、機材が使えなかったりすることが何度かあったからです。(2010年のニューズレター第18号に記したとおり) 運営の仕事が大変だと思ったことは一度もありませんが、教室予約と非常勤と例会で一週間全部三田に足を運んだり、教室予約と夜間の非常勤で一日に二度三田に足を運んだりするわりには、発表者や参加者にご迷惑をおかけすることが多く、非効率的であると感じていました。それならば、事務職員も警備員もみな私の顔を知っている大学に会場を移した方が安心なのではないか。昨年5月にこの考えがふと頭に浮かび、直後に三田が節電で使えなくなったのに乗じて、7月の談話会と9月の例会を跡見の「試運転」に利用しました。

母校か、それとも本務校か。実のところ、この問いは、実際上の必要を超え、たいへん贅沢な問いのように思われました。というのは、母校と本務校がどちらも東京の真ん中にあるというのは、(3.11以降、東京の不安要素が増したとは言え) 希有な幸運だからです。いや、それ以前に、そもそも本務校をもっていること自体が希有な幸運というか奇跡です。母校は誰にでもあるものですが、本務校は(少なくともある世代以降の人文系の研究者にとっては) ないのがふつうで、公募に応募するというのは、(当たり外れにまったく根拠がないとは言わないまでも) ほとんど宝くじを買うようなものでしょう。それならば、奇跡的に当たった宝くじは、他の研究者に未永く還元すべきではないか。着任一ヶ月後の昨年5月にこの考えがふと頭に浮かび、迷わず例会会場を跡見学園女子大学文京キャンパスに移すことにしました。

奇跡的なくじ運に恵まれたおかげで、今までフランス語学会と無縁だった大学を例会会場として開拓することができ、ちょっと誇らしい気がしています。そのせいかどうか分かりませんが、今年は例会予定に若い研究者のお名前がずらりと並び、ついに新しい時代の幕開けかとわくわくしています。狭苦しいキャンパスですが(そのため教員の研究室はすべて新座キャンパスにあります)、研究を深める場として存分に活用していただければ幸いです。みなさんと茗荷谷でお目にかかれるのを楽しみにしています。

(酒井 智宏)

8. 2011年度例会予定

以下は4月30日現在の情報です。最新情報は、学会ホームページで随時更新されております。

なお、昨年度まで11月例会は関西で開催されていましたが、今年度から11月例会も東京で開催されます。

第277回例会 2012年4月21日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 3階 M2308 教室

(1) 益子 優介 (筑波大学大学院)

「フランス語における場所の指示表現について」

(2) 木田 剛 (筑波大学)

「談話にあるジェスチャー: 日本人学習者から見たフランス語」

司会: 酒井 智宏 (跡見学園女子大学)

第278回例会 2012年5月12日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 3階 M2308 教室

(1) 栗原 唯 (青山学院大学大学院) 「名詞文の解釈□共発話者の役割」(仮題)

(2) 渡邊 淳也 (筑波大学) 「叙想的時制と叙想的アスペクト」

司会: 守田 貴弘 (東京大学)

第279回例会 2012年6月23日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 3階 M2308 教室

(1) 西脇 沙織 (慶應義塾大学大学院) 「発表題目未定」

(2) 近藤 野里 (東京外国語大学大学院) 「発表題目未定」

司会: 酒井 智宏 (跡見学園女子大学)

第280回例会 2012年9月29日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 3階 M2308 教室

(1) 佐々木 幸太 (関西学院大学大学院) 「発表題目未定」

(2) 山田 里奈 (早稲田大学大学院) 「発表題目未定」

司会: 守田 貴弘 (東京大学)

第281回例会 2012年10月27日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 3階 M2308 教室

(1) 津田 洋子 (京都大学大学院) 「発表題目未定」

(2) 発表者未定 (発表者募集中)

司会: 酒井 智宏 (跡見学園女子大学)

第282回例会 2012年11月日時未定

会場: 東京 (未定)

(1) 川上 夏林 (京都大学大学院) 「発表題目未定」

(2) 石毛 健嗣 (東京大学大学院) 「発表題目未定」

司会: 守田 貴弘 (東京大学)

第283回例会 2012年12月1日(土) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館 3階 M2308 教室

(1) 守田 貴弘 (東京大学) 「発表題目未定」

(2) 春木 仁孝 (大阪大学) 「ça について」 (仮題)

司会: 酒井 智宏 (跡見学園女子大学)

9. フランス語談話会について

東京で開催される談話会の世話人をさせていただいている。担当となるのは、今年で田原が2年目、須藤が3年目である。そもそも談話会は、東西の研究者の交流という使命をおびていたと聞かすが、その後も様々な趣意のもとに長いあいだ企画が続けられている。なかでも、談話会をもっとも特徴づけてきたのは、異分野に開かれた窓としての役割であろう。フランス語学を主軸としながらも、あるテーマを深く掘り下げていく普段の例会発表での意識とは趣を変えて、横の広がりの中でとらえなおす。ここ十年ほどの談話会のテーマをみると、対照言語学的な視点や周辺分野との比較の視点からの企画が中心だ。その背景にあるのは「この現象は他の言語ではどうあらわれるのだろうか」、あるいは「このテーマは他の学問分野ではどう扱われているのだろうか」という疑問である。それは、私たちが研究をすすめていくなかで、何度も頭に浮かぶ類のものだ。浮かびはするが、すべてを調べる余裕はないという現実の前に、はかなくも消えていく。浮かんで消えるそのような日常的な疑問をすくいあげて、当該分野の専門家にお話を聞く機会をつくる、これが世話人の役割なのだろうと思っている。

もちろん、素朴な疑問から出発して、実際に企画につながるには幾重もの制約がある。特に、人的つながりの面では、私たち世話人だけでは限界があるのは明らかだ。ぜひとも、諸先輩をはじめ皆様のご協力を仰ぎたい。

さて、先に「東西研究者の交流」にふれたが、これまで談話会は東と西の2箇所で行われてきた。近年は、7月に関東で、11月に関西でという、年二回のスタイルで定着している。しかし今年度から、東京での年一回の開催へと変更になる。

最後に、この場をお借りして次回談話会のお知らせをさせていただきます。例年と異なり開催日が日曜日となっている。十分ご注意願いたい。

テーマ: Phonétique-phonologie en L2 et corpus oraux : le français et l'anglais

日時: 2012年7月22日(日) 15:00-18:00

会場: 跡見学園女子大学 文京キャンパス 2号館 M2308 教室

発表者: Sylvain Detey (早稲田大学), 近藤真理子 (早稲田大学), 神山剛樹 (パリ第8大学)

発表言語: 日本語・フランス語

各発表の題目と要旨は、学会HPを通して後日告知させていただきます。なお、談話会は非学会員の参加が自由となっている。お誘い合わせの上でお越しいただければ幸いです。多くの方々の来場をお待ちしている。

(須藤佳子・田原いずみ)

10. 研究会だより

◆ 関西フランス語研究会

関西大学を会場に、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。毎月、後半の土曜日に1回開催というのが原則でしたが、なかなかそのとおりになっていません。時間は、原則として、午後2時から5時です。今年は、イレーヌ・タンバ先生を招いて文法的性についてシンポジウムを開催したこと、鈴木シルヴィ先生が東京からいらして貴重なお話をさせていただいたことが特筆に値します。昨年度の発表は以下の通りです。

5月21日

シンポジウム: 「文法的性について、ずっと前から知りたかったこと」

1. 大久保朝憲「フランス語の文法的性と性差別」
2. 藤村逸子「フランス語の文法的性が問題である理由」
3. 平塚徹「文法的性と認知」
4. イレーヌ・タンバ「フランス語のgenreと日本語の性という用語の問題」

7月2日

東郷雄二「時制と談話構造 □ 同時性を表さない半過去再考」

7月23日

岸本聖子「動詞 devoir の本質的機能」

12月10日

鈴木シルヴィ「呼格的用法におけるフランス語の名詞形の呼称—1人称の所有形容詞の使用条件と機能に注目して—」

1月21日

高橋克欣「quand 節と半過去 - 談話的時制解釈の試み」

この研究会の趣旨は、論文や学会発表をひかえる人がその準備のために、あるいはまた、関東で発表を終えた人が関西でそれを聞けなかった人のリクエストにこたえてというように、形式にこだわらず、気軽に意見・情報の交換ができる集まりです。また、最近の研究発表が中心ですが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども歓迎しますので、発表を希望される方は世話人の平塚か大久保までご連絡ください。昨年は5回しか開けませんでした。アットホームな雰囲気の集まりですので学生の方も遠慮せずにご参加ください。

案内はメーリングリストFrenchlingのみで行っていますが、加入されていない方は世話人までアドレスをお知らせいただければ、個別にメールでご案内いたします。

平塚徹: hiratuka@cc.kyoto-su.ac.jp

大久保朝憲: tomonori@ipcku.kansai-u.ac.jp

◆ 東京フランス語学研究会

昨年度は、「大学院生のためのフランス語学研究会」と題して、下記のような研究会を実施しました。

日時：2012年3月5日(月) 13時から18時
場所：慶應義塾大学三田キャンパス 研究室棟 A 会議室
プログラム：

前半司会：塩田明子(慶應義塾大学非常勤)

13h～13h40 粕谷みゆき(青山学院大学大学院2012年度再入学)「広告に隠されたもうひとつの意味」

13h40～14h20 西脇沙織(慶應義塾大学大学院)「フランスの新聞・雑誌におけるアイロニー」

14h20～15h 日野真樹子(西南学院大学大学院)「bon・ben・bon ben の対話調整用法について」

15h～15h40 栗原 唯(青山学院大学大学院)「名詞文における解釈の問題」

後半司会：渡邊淳也(筑波大学)

16h～16h40 山中冨ゆ子(筑波大学大学院)「日本語教育への応用を目指した日仏語の制限的表現の対照研究」

16h40～17h20 益子優介(筑波大学大学院)「フランス語の場所の指示表現について」

17h20～18h 山田里奈(早稲田大学大学院)「フランス語における「中心」を表す表現について」

この研究会の席上、類似の機会を今後定例化してはどうかという提案がなされ、2012年4月より、「東京フランス語学研究会」と題して、大学院生など、若手を中心としたフランス語学研究者の気楽な研究発表、議論、交流の場を作ることにしました。

日本フランス語学会と直接の関係はありませんが、多くのかたがたに参会していただきやすいよう、フランス語学会の例会がひらかれる日に、同じ(または近接した)会場で、原則として13時から14時30分まで開催します。フランス語学会例会の会場が変更されるとき、編集委員会などと重なるときは開催せず、年間5～6回程度の実施を目安とします。

会員資格、発表資格、会費などの制度は設けませんので、関心のあるかたはどなたでも自由に参会、発表していただけます。発表は、フランス語(学)に関係することであれば、どのようなテーマでもかまいません。また、完成された内容である必要もありません。学会発表の前段階にあたるような習作的な発表や、先行研究にたいする論評といった形の発表も歓迎します。時間の内わけは、発表60分+質疑応答・コメント30分です。

2012年4月末日現在、今年度の研究会予定(4月については実施実績)はつぎのようになっております。

第1回研究会

日時：4月21日(土) 13時から14時30分

場所：跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館3階

M2308 教室

発表者：近藤野里(東京外国語大学大学院)

題目：リエゾン子音の位置に関する一考察

第2回研究会

日時：5月12日(土) 13時から14時30分

場所：跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館3階

M2308 教室

発表者：菊池大輔(中央大学大学院)

題目：フランスにおける共和国思想と多言語主義の考察

第3回研究会

日時：6月23日(土) 13時から14時30分

場所：跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館3階

M2308 教室

発表者：津田香織(筑波大学大学院)

題目：未定

第4回研究会

日時：9月29日(土) 13時から14時30分

場所：跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館3階

M2308 教室

発表者：未定(募集中)

第5回研究会

日時：10月27日(土) 13時から14時30分

場所：跡見学園女子大学文京キャンパス 2号館3階

M2308 教室

発表者：未定(募集中)

第6回研究会

日時：11月10日(土) 13時から14時30分

場所：跡見学園女子大学文京キャンパス(教室未定)

発表者：未定(募集中)

発表を希望なさるかたは、下記ホームページの「お問い合わせ」の項目から世話人あてにご連絡ください。最新の予定については、ホームページの「今年度の研究会」の項目でご確認ください。ホームページ上で発表者が未定になっている回については、発表者を募集しております。

東京フランス語学研究会ホームページ：

<http://ftky.jimdo.com/>

(世話人：渡邊淳也・塩田明子)

11. 2011年度収支決算報告

(単位 円)

収入の部	
会費	802,000
機関誌売上金	104,000
広告収入	20,000
預金利息	5,640
その他雑収入	46,000
小計	977,640
前年度繰越金	3,865,627
計	4,843,267

支出の部

BELF45 号印刷代金	444,696
BELF46 号編集実費	20,000
ニューズレター印刷代金	18,848
発送費・通信費	223,090
特別発表（講演）謝礼	150,000
人件費	203,527
会場費	29,057
事務消耗品費	9,130
振込手数料	20,725
ホームページ管理費	2,115
雑費	10,000

小計 1,131,188

次年度繰越金 3,712,079

計 4,843,267

次年度繰越金の内訳は以下のとおり

銀行預金（三井住友銀行普通預金）	368,124
郵便貯金（普通）	288,506
（振替）	1,038,398
銀行預金（三井住友銀行定期預金）	2,002,800
現金	14,251
計	3,712,079

2012年3月31日

〒560-0043

大阪府豊中市待兼山町1-8

大阪大学大学院言語文化研究科内

日本フランス語学会

12. メーリングリスト frenchling からのお知らせ

frenchling はフランス語学関係の情報交換を目的としたメーリングリストです。フランス語学関係の研究会や講演会といった催事の告知、あるいはフランス語そのものについての質問、疑問、そして議論に活用してください。利用にあたってはいくつかの注意を守っていただきたいのですが、当メーリングリストはフランス語学会と密接な関係にあります。フランス語学会を含め、特定の学会員だけを対象とした連絡には使用しないでください。学会員以外にも開かれたオープンな会合や呼びかけにはどんどん利用してください。ただし、特定の政治的メッセージを含むもの、営利的な活動、アルバイト募集等の研究・教育と関係のないアナウンスなどはご遠慮ください。（不適切と思われる投稿に対しては、適宜管理グループから注意喚起を行ってきましたが、出来るだけそのような事をしなくてもいいように皆さんの適切な利用をお願いします。）

なお、以前はフリーメールのアドレスでは登録をお断りしていましたが、現在はフリーメールのアドレスによる登

録も受け付けています。また、アドレス変更、あるいは退会の時には旧アドレスの削除は各自でしていただくようお願いしていましたが、現在は管理グループで削除していますので、直接管理グループのアドレスまでご連絡ください。また、ML への登録は自動では出来ない設定になっています。自動登録をしようと試みると、あとで管理グループが登録しようとしても不具合が発生して登録できないようになりますので、メンバー以外の方に勧められる場合は、必ず管理グループまで連絡するようお願いください。管理グループのアドレスは以下の通りです。

frenchling-owner アットマーク yahooroups.jp

(frenchling 管理グループ)

13. 編集後記

今号では、木下光一先生の追悼特集を組みました。1994年、前年に修士論文を出したばかりの大学院生だったわたしがはじめてフランス語学会の例会で発表したとき、木下先生が温情的な、しかし的確なコメントをくださり、お励ましくくださったことを思いおこします。退職なさってから例会によく出席しておられました。2000年以降わたしも参加することになった夏の研究会合宿では、毎年お目にかかり、昨年もお元氣なお姿に接していただけに、お亡くなりになったことがどうにも実感できず、ついつい、どこかでお目にかかることができるのではないかと錯覚してしまいます。

かつて、木下先生が献身的に支えてくださっていたフランス語学会の業務を、編集委員会、事務局、企画・運営担当など、各種担当者で分業するようになってから、すでにかかりの年月が経っています。時代の変化は速く、さらに見なおしたほうがよいところもあるかもしれません。しかし、どのように時代が変わっても、学会の草創期に木下先生が築いてくださった、虚飾を排し、実質的な研究を推進しようとするフランス語学会の伝統が続いてゆくことを、願わずにはいられません。

(渡邊淳也)

♪ ニューズレターのバックナンバーは、日本フランス語学会のホームページで読むことができます。

<http://www.sjlf.org/>